

## ライフワーク

2021. 9. 22

10以上も前の話になる。教頭会の東北大会が青森で開催された。南会津教頭会の代表として青森まで行ったことがある。1日目は、開会式と講演会があった。講演会の講師は、地元青森の方で太宰治の研究者だった。お話を聞くと、元教員の方で、退職されてから太宰治の研究に没頭したのだそうである。元々、太宰治のファンというわけではなく、作品を熱心に読んでいたわけでもなかったそうである。

今までの自分の人生を振り返り、この先の人生のことを考えたときに、ふと「ライフワーク」という言葉が浮かんだ。私の中学時代の恩師は、「子どもと女性が、私のライフワーク」とおっしゃっていた。ライフワークと呼べるものがある人生は素敵だと思う。そんなことを考えていたときに、青森の太宰治研究家の先生のことを思い出したわけである。

コロナ禍の影響により、以前よりも出かけることが少なくなった。その結果、週末にふと時間ができることがある。せっかくなので、普段はできないことをすればいいのだが、ただの時間つぶしではなく、何か生産的なもの、形に残るものに取り組みたいと考えている。何かに追われるようにあくせくして進めるのではなく、時間ができたらやるかぐらいのスタンスである。

ところが、悲しいかな、それが見つからない、決まらない。このコロナ禍はチャンスだとは分かっている。一見、マイナスに思えることが、見方を変えるとプラスになることは多い。

作家になったつもりで、小説でも書ければいいのだが難しい。実は、それなりの読書量があった高校時代に、小説を書こうとしたことがあった。原稿用紙を準備し、作家気取りで万年筆を手にし、さあ書くぞと机に向かった。だが、現実には甘くはなかった。書き出しが浮かばない、決まらない。いたずらに時間だけが過ぎ、自分には無理なんだと思い知らされた。それからは、専ら一読者を全うしている。

小説がダメなら、俳句や短歌、詩はどうかというと、全くその気にならない。郷土史家のようなものもいいとは思いますが、そこまでの専門性もない。絵や彫刻ができたらと思うが、才能もなく、すぐにやめるのが目に見えている。

ああでもない、こうでもないと思案に暮れていても仕方がない。まずは始めてみようということで、今までの教員人生を振り返ってみることにした。例えると、アルバムづくり、文集づくりのようなイメージである。その作業過程で、書齋にある、おびただしい量の蔵書やファイルにも目を通すようになる。そうすることで、捨てていいものと、とっておくべきものとに分ける作業も進むことだろう。

もし、この作業が軌道に乗り、新たに取り組むべき課題が見えてきたとき、それがライフワークともいうべきものになるかもしれない。10年後には、恐ろしいほどの時間が生まれるようになるかもしれないのである。ライフワークともいうべきものが見つかるかどうかは、今後の人生を左右する重大事である。だからといって、太宰治研究とはいかないだろう。それでも、「〇〇研究」に憧れるのは事実である。